

宮沢賢治の童話を
落語仕立てで語る

賢治寄席へようこそ I

宮澤哲夫 著



まえがき 賢治寄席への招待

本書『賢治寄席へようこそ』は、宮沢賢治の作品を読み合い、ともに豊かな賢治ワールドを楽しもうと、二〇一五（平成二十七）年に発足した「三鷹大沢・宮沢賢治の会」の会員用配布プリントを基にした『賢治寄席へようこそ——さても楽しき物語たち』をまとめたものです。賢治作品に親しめるようにと、文体を落語の語り口に求めてみました。

各話は、ひとつの作品を二回で完結させるため、「前半の部」と「後半の部」に分けました。前半では作品の流れを概観し、全体像を浮かび上がらせることを目的として、一般的な見解と思われる読みをとりました。

後半では、いくつかの違う角度からの光線が、思いがけない面を照らし出すかもしれないと考えました。作品の気になる箇所に補助線を引いてみる、あるいは水底の状態を探るため錘おもりを下ろしてみる、そんな意図によるものです。

具体的には、物語の主人公でないマイナーな人物の視点からの読み直し、また架空の人物からの発言などを試みました。ときには、いわゆる〈裏読み〉を、また講演会や座談会などを開催し

たりして、興味をもって読んでもらえることを心がけました。

賢治作品をさらに親しんでもらおうと、理解しやすく親しめるような文体を使いたいと、語り口は（見よう見まねで）落語を参考としました。

このおしゃべりの中には多くの賢治研究者の見解が含まれておりましょう。本書は宮沢賢治の研究書ではありませんし、このような語り口のため、論考であれば本来は「注」として別記すべき論者のお名前を特に記すことはしておりませんが、多くの学恩に感謝申し上げ、ひたすらご海容を願うばかりです。

なお、賢治の作品は現代表記に改められている『宮沢賢治コレクション』（筑摩書房）から引用させていただきました。（ふりがなは省略、また補足しました）

【もくじ】より

まえがき 賢治寄席への招待

第一席 「どんぐりと山猫」(前半の部) いざ裁判へ

第二席 「どんぐりと山猫」(後半の部) 吾輩は山猫である

第三席 「水仙月の四日」(前半の部) あわや子供が……

第四席 「水仙月の四日」(後半の部) へとられた 子・雪童子

第五席 「猫の事務所」(前半の部) これこれ弱いものをいじめてはいかん

第六席 「猫の事務所」(後半の部) 三毛猫はつらいよ

第七席 「カイロ団長」(前半の部) ちよいと一杯のつもりで吞んで

第八席 「カイロ団長」(後半の部) へカイロ団長の謎にせまる へ まあ仰々しい

第九席 「祭の晩」(前半の部) 山男が嬉しがつて泣いてぐるぐる

第十席「祭の晩」（後半の部） われは山の神にいささか縁ゆかりあるもの

以下は「Ⅱ」所収

第十一席「蜘蛛となめくじと狸」（前半の部） われら三人マラソン選手

第十二席「蜘蛛となめくじと狸」（後半の部） 回顧欄からご登場の方がた

第十三席「気のいい火山弾」（前半の部） 昔は、むしろ泣きました

第十四席「気のいい火山弾」（後半の部） ベゴ氏を偲ぶ座談会

第十五席「革トランク」（前半の部） さていっぱい詰め込みます

第十六席「革トランク」（後半の部） 敏腕記者の取材報告メモから

第十七席「月夜のでんしんぼしら」（前半の部） 歩け、歩け、さあ歩け

第十八席「月夜のでんしんぼしら」（後半の部） 対談「百年むかしは」

第十九席「鹿踊りのはじまり」（前半の部） おれも鹿かだ

第二十席「鹿踊りのはじまり」（後半の部） 愛えどしおえどし

第三席 「水仙月の四日」 (前半の部) あわや子供が……

本日もまた前回に懲りず、にぎにぎしく賢治寄席においていただきまして、まことにありがたく御礼申し上げます。

こうして高い空を見上げておりますと、あまたの星がきらめき、月も輝き、すぐに雲が厚いべールを張りつけにまいます。ゆっくりと地球が動き、時が移りゆくのを感じますな。

前席は『注文の多い料理店』より「どんぐりと山猫」を二度におよんで皆さま方のお耳(いやお目)にかけました。

さて反響はいかにと、客席を見回しましたところ、パチパチと盛大(なに、ほんの少し)なるお手と、ついでに本日の演題を「水仙月すいせんづきい」と可愛いお声でいただきました。「水仙月の四日」は絵本にもなっていますから、ごらんになったお子さんがいらっしやるんでしょう。

その声についつられ、本席を「水仙月の四日」と思っていた次第でございますな。

じつは承ってから、はたと考え込んでしまいました。

どうしてどうして、私めがお話しできるような、生易しい作品ではございませぬ。賢治さんからはきつく叱られ、また皆さま方からの「講師、見てきたような」の誹りを覚悟のうえで、お喋りいたすつもりでございます。

では、しばらくはお耳を拝借。

さて、この「水仙月の四日」でございます。賢治さんの作品の中でも飛び抜けて自然の描写がすばらしく、一進一退する季節の変わり目、特に冬から春への移りゆく一瞬の出来事をみごとに切り取った作品でございます。

「水仙月」って何月のこと？

そんな眼をされると答えに困ってしまいます。「水仙の咲くある月のことさ」と逃げるほかありませぬ。冬が春に席を譲るあたりの月でしょうか。

舞台は東北地方、イーハトーブと賢治さんが命名した岩手県あたりでしょうか。このお話は象の頭のような雪の山裾をめぐって起きた悲劇とでも申せましょうか。

さて冒頭に「雪婆んごは、遠くへ出かけて居りました」と奇妙なことが述べられています。

「雪婆んご」とは、まあ恐ろしいげな言葉ですな。雪の老女、雪婆あ。まさか「雪の女王」ではありませんが、それに近い妖怪といったイメージです。

「猫のような耳」「ぼやぼやした髪」「ぎらぎら光る黄金の眼」が青く光ります。雪を操る老婆

の姿が目には浮かぶようですな。それが今は遠くにいつていて、留守のようで、やれやれです。

さて、この物語の主人公ともいえる雪童子ゆきわらわすが、べろべろ赤い舌を吐く雪狼ゆきおのを二匹連れて登場いたします。

これも雪の妖怪でしょうか。いや精霊といった感じですよ。雪婆ゆきばあんこの命ずるままに働く、いわば配下の少年。この少年の下に雪狼が従っているのですな。みな雪や吹雪の化身でしょうか。

この雪童子が青い空の见えない星に向つて、叫びかけております。歌のようでございますな。

「カシオピア、もう水仙が咲き出さずぞ おまえのガラスの水車みずぐるま きつきとまわせ」と「アンドロメダ、あぜみの花がもう咲くぞ、おまえのラムプのアルコホル、しゅうしゅと噴ふかせ」の二つの歌です。

カシオピア座は、自分の美貌を自慢したカシオピアが海神ポセイドンから罰を受け、椅子にすわつて逆さまに空にぶら下がつております。天の真ん中にあるので水車といったのでしようかな。アンドロメダはその娘で、岩に縛られ怪物の生贄いけにえとなりますが、天馬ベガスに乗ったペルセウスに助けられます。皆さま方よくご存知のギリシャ神話の世界ですな。

呼びかけに応じて空から青びかりが還かえつてまいります。地上からの雪童子の呼びかけに天上からの返答があつたのでしよう。天と地との響きあいでしょうかな。

雪童子は雪の丘に登ります。

強い風のため雪は貝殻のようになっております。その頂には栗の木が黄金色のやどりぎをつけております。

やどりぎは昔から神聖なものとされ、世界各地にさまざま言い伝えや風習があるようです。雪童子はそれを取るようにと雪狼に命じます。がりがり齧^{かじ}って落とした枝を手にした雪童子は、はるか下に広がる町を眺めます。川が流れ、汽車の白い煙のたちのぼる停車場も見えます。なかなか大きな町のような。

雪山の麓を赤い毛布を着た子供がせかせか歩いております。昔はこれを赤ゲットと申しましたな。雪国ではみんな着たもんです。小学生でしょうか。カリメラのことを考えながら家路を急いでいたのです。

カリメラはご存知のように、カルメ焼きとも申しますな。昔は縁日などに神社の境内で作りながら売っております。火にかけて赤銅の小鍋にザラメを入れ、溶けたところに小さなすりこぎの先に重曹をつけてかき回します。するとカルメ焼きができあがる。売っている人はうまく作るもんです。だが簡単そうに見えて、これがなかなか難しい。真似^{まね}をしてみても、なかなか膨らんでくれない。え、そんなものは見たこともない。やあ、これは失礼、今ではめったに見られませんな。つい脱線。

物語ではこの子供、カリメラのことばかり考えております。子供を見かけた雪童子が「あいつは昨日、木炭のそりを押して行った。砂糖を買って、じぶんだけ帰ってきたな」と言っております。

す。この「じぶんだけ」ということから、昨日はお父さんの手伝いで櫓すりを押して町に行ったことが分かります。

昨日は土曜日。学校から帰ってから、お父さんの櫓の後押しをして町に行っただけでしょう、なかなか感心な子ではありませんか。お父さんと二人、昨夜はそこに泊まったのでありましょう。家に急ぎます。

どうやらこの山裾のあたりが峠になっていて、その向こうに家があるようです。

早くカリメラを作りたい。急ぎます。お日さまが「まばゆい白い火を、あたらしくお焚たきなされて」いるので、まだまだ陽は高いようです。台地の雪はまばゆい雪花せつか石膏せっこうの板になって光っております。

雪童子は手にしたやどりぎの枝を子供の前に投げつけます。不思議そうにした子供はその枝を手に入れます。

人間には雪童子や雪狼の姿は見えませんので、不思議に思うのは無理ありません。いきなりどこからか飛んできたので、きつと風で枝が折れたと思ったのでしょうか。それを手にして子供はまた歩きだします。そんな様子を雪童子は丘の上から見えております。

ゆっくり太陽が空の彼方に離れていくようです。すると、まっ青な空からまっ白な鷺さぎの毛のような雪が落ちてまいります。

下に広がる平らな野原の雪に、ビール色の日光が注ぎ、檜ひのきの森が茶色に並んでおります。

風が出てまいりました。

その頃、東の遠くの海の方で、カタツという音がしました。「空の仕掛けを外したような」と賢治さんは書いておられます。陽は白い鏡のように変わってしまった、その面を何かどんどん横切っていくとも書かれておられます。雪童子も雪狼もじつと空を見つめておられます。何かが起こりそうな気配ではありませぬか。

風は強まり、足元の雪は流れます。向こうの山脈の頂に白煙がたつと、西の方はすっかり暗くなり灰色になってまいります。

雪童子の眼が鋭く燃えるように光ります。とうとう細かな雪がやってきました。

あの子供が心配ですな。まだ峠を目指して歩いているはずです。引き裂くような、吠えるような風の音です。これはますます心配ですな。

その時です。妖しい声^{あや}が聞こえてきましたよ。「ひゅう、なにをぐずぐずしているの。さあ降らすんだよ」と声は不気味に響きます。「降らすんだよ。ひゅうひゅうひゅう」。「ひゅひゅ、降らすんだよ、飛ばすんだよ」。

そうです、これが雪婆んごの声です。遠くにいつて留守だった雪婆んごが帰ってきたのです。そして「向うからさえわざと三人連れてきたじゃないか」なんて言っております。西の彼方から新しく三人の雪童子を伴ってやってきたようです。

これは大変なことになります。あの子供が危ない。

「今日はここらは水仙月の四日だよ。さあしつかりさ。ひゅう」

雪婆んごがとうとうその恐ろしい姿を現しました。白髪が雪と風の中に渦をまき、尖った耳や光る黄金の眼が黒雲の中に浮かびます。

「今日はここらは水仙月の四日だよ」とは不思議な言葉です。このあたりは今日が水仙月の四日にあたるという意味でしょうか。どうもこれは人間の普通の暦ではありません。不思議な世界で使われる暦。しかもその四日とは。これは謎ですね。

「さあしつかりさ」とは雪を降らせ、風を吹かせると言っていることに違いありません。そうすると大吹雪が「この日」「ここ」で起きるはずですよ。

西から連れられてきた三人の雪童子たちも、それぞれ二疋の雪狼を連れてきております。

すると、みんな、雪婆んご、雪童子三人、雪狼八疋（本文では九疋ですが）という大軍団。どこから来たのでしょうか。

「西の方の野原から」と書かれております。そうです、はるか彼方、そこはシベリア大陸。この大軍団はシベリア寒冷前線、あのシベリアからの低気圧に伴う寒気団なんですな。今、恐ろしい雪婆んごに率いられております。

この雪婆んごの声に、雪の丘にいた雪童子は電気に触れたように跳び上がります。

そして草の鞭を夢中になって振ります。雪狼も狂いだします。もう帽子も飛ばしてしまうような大騒ぎです。西から連れられて来た三人の雪童子も、挨拶もなくいっしょになって、血の気も

ない顔で唇を噛んで革鞭を振って走り回ります。雪婆んこの叫び声と、革鞭の音、雪狼どもの激しい息づかいが、雪煙か空か分らなくなつたあたり一面に響きます。あの子供はいつたいたいどうなつたのでしょうか。

聞こえました、聞こえました。かすかな泣き声を雪童子は聞きつけたのです。あの子です。生きています。ここで「雪童子の瞳はちよつとおかしく燃えました」と書かれております。えつ、どうしたのでしょうか。

何を思ったのか、いきなり激しく鞭を振ってそつちに走り出しました。それがとんでもない方角だつたのでしょうか。しばらく耳を澄ませております。

「なまげちゃ承知しないよ。降らすんだよ」「さあ、ひゆう」と雪婆んこの叫びが響きます。

激しい風や雪の中から、やつと泣き声が聞えました。そちらに走る雪童子の顔に雪婆んこの髪の毛がざざりと気味悪くあたります。ぞつとする場面です。

見るとさつきの子供が、雪から足が抜けず、手について起きあがれないで泣いています。

「倒れておいで、ひゆう、だまつてうつむけに倒れておいで」と雪童子が声をかけます。

「今日はそんなに寒くないんだから凍えやしない」

子供には雪童子は見えませぬ。

雪童子はどうもこの子を助けるつもりの方です。そんなことをしたら雪婆んこの命令に背くことになり、雪童子の後が心配です。

子供は口をひくひくさせてまだ泣いておられます。雪童子はわざとぶつかって子供を倒します。雪婆んごが裂けたような紫色の口に尖った歯を出して近づいてまいりました。やや、子供が見つかっては一大事です。

「おや、おかしな子がいるね」

ああ、とうとう見つかりました。

「こつちへとっておしまい。水仙月の四日だもの、一人や二人とつたつていいんだよ」

一人や二人、子供の命をとつてもいい。このままでは子供が危ない。それを耳にした雪童子は、「ええ、そうです。さあ、死んでしまえ」

とわざと子供にぶつかります。ここは雪童子も必死です。

「倒れているんだよ。動いちゃいけない」

まだ三時だというのにあたりはもう薄暗く、日暮れのようにです。

「あしたの朝までカリメラの夢を見ておいで」

雪童子はこう言つて、子供の赤い毛布の上に雪をかぶせてやります。

風と雪の中でその日は暮れ、夜中いっぱい雪が降り、明け方までの大吹雪でした。「降つて降つて降つたのです」と書かれております。

夜明けに近づいたころ、やっと雪婆んごが雪童子に「さあ、そろそろやすんでいいよ」と言いました。やっとお許しが出たのですな。

「いいあんばいだった。水仙月の四日がうまく済んで」

こう言い残して雪婆んごは、闇の中に眼を青く光らせ、ばさばさの髪を渦にして、口をびくびくさせ、一人で海の方に去って行きました。

やっと解放された雪童子たちは、ここではじめて挨拶を交し、また今度はどこで会うのだろうかなどと話をいたします。「さつきごどもがひとり死んだな」と言われて、雪童子は「大丈夫だよ。眠ってるんだ」と答えて仲間の暗黙の了解を得ます。雪婆んごの命令に背いたことを仲間に話したということですか。同じ仲間だという連帯感からでしょうか。

早く一緒に北に帰りたいと言ったり、カシオペアを見上げて「どうして火がよく燃えれば、雪をよこすんだろう」と不思議がったりいたします。それにも「電気菓子とおなじだよ」と答えが書かれております。

このあたり、皆さま方、お分かりでしょうか。火をよく燃やせばそれだけ綿菓子もたくさんできるといふことでしょうか。どうも分かったような分からぬような、奇妙な気もいたします。

まあそれはさておき、三人の雪童子はそれぞれ雪狼を連れて北に帰っていきます。

雪童子は子供の上にかけて雪を雪狼に取り除かせます。そのとき村の方から人影が近づいてまいります。物語は「お父さんが来たよ。もう眼をおさまし」という雪童子の叫びと、「子どもはちらつとうごいたようでした。そして毛皮の人は一生けん命走ってきました」と結ばれております。

子供は助かったようで、めでたしめでたし、やれ一安心。



雪原のスイセン スイセンは早春から咲き始めるが、
そのころは大雪が降る時期でもある。

でも、やってきたのは本当にお父さんでしょうか。それに本当に子供は助かったのでしょうか。
さあそれは次回の第四席でとっくりと。
さて、それでは本席はこれにて。気を付けてお帰りください。ご機嫌よろしう、では。



ヤドリギ 他の樹木に寄生してこんもりと茂る。常緑なので栗や白樺などの落葉樹につくとよく目立つ。冬に淡黄色（^{きん}金色）の透きとおった実をつける。

第四席 「水仙月の四日」(後半の部)〈とられた〉子・雪童子

さて前席では「水仙月の四日」という作品の流れと、ところどころに顔を覗かせている不思議なことのいくつかを眺めました。

さて今席は、もう少しそのあたりを見つめ直してまいりましょうか。この雪童子ゆきわらすの正体を考えることによって、この物語の隠れている別の世界が顔を見せてくれるかもしれない。

では、この作品の主人公とみられる雪童子とはいったい誰なのか、やどりぎを投げつけた赤い毛布けつとの子供との関係はなんだろうか、それに雪婆ゆきばこの正体は、そして「水仙月」の意味はなど、いろいろなことを皆さまといっしょに考えてまいりたいと思っております。

まず雪童子とはいったい誰でしょう。

雪狼ゆきおしのを連れて雪を降らせ嵐を起こす雪童子は、私めの思いますところ、「とられた」子供、雪に命を奪われた子供の化身ではないのか。かつては生きていた元気な少年です。それがあの日、

雪の山かどこかで、または雪崩などによって、生命を落としてしまった少年たちの「今の」姿ではないだろうかと思うのですよ。

では誰によって「とられた」のか。

それはあの恐ろしい雪婆んごによってということになります。

はるか西の彼方シベリアのいわゆる「シベリア寒気団」の担い手のひとりが雪婆んごであることは前席でも触れましたな。

その雪婆んごによって、あちらの世界に連れ去られ、死の世界に「とられた」子供がこの物語の主人公、雪童子ではないのかと考えるのです。こうした考えが妥当だとすると、さまざまなことがつながっていくように感じられてまいります。

このように雪童子の正体を「死んだ子供の今の姿」としてみると、これと対称的なのが赤い毛布の子供だということがはつきりと浮かびあがってまいります。生と死との対比、これがこの作品の底に流れている大きな基調音です。これが大地のめぐり、時間のめぐり、自然現象のめぐり、これらの大きな土台の上に乗りながら、この物語を作っております。

雪の道を急いでいるあの子供が何を考えておりましたか。

カリメラでした。砂糖を鍋に入れ火を加えてカリメラを作りだす。何かから何かを作りだす。大袈裟に言えば、これは「生」を作りだすことにつながります。加える火には雪や氷を溶かす力があります。子供の胸の中には火が燃えていたということですね。それに身に着けている赤い毛

布はまさしく生のシンボル。

してみると、この子供は「生」の代表者としてこの物語に登場している存在です。この「生」に対する雪童子は、さきにも見ましたように「死」の世界からきた、人間には見えない精霊として登場しております。

すると雪童子が今どうしてここに来ているのかという意味も見えてまいります。「死」の前触れとしての「水仙月の四日」のための準備ですな。この日に大吹雪をもたらすための下見に、二正の雪狼を連れてやってきていたのです。いわば先発隊ですな。もちろん命じたのはここに姿を現していない雪婆んです。はるか西のシベリアにまだ居座っております。

物語はこの雪童子が赤い毛布の子供を偶然に目にしたことから動きはじめます。

昨日もお父さんと二人で木炭の櫓そりを押して町にいったあの子供です。今なにを考えているのかも雪童子には手に取るように分るのですな。

すると投げてやったやどりぎの意味もはっきりしてまいります。

雪童子は丘の上の栗の木についていたやどりぎを雪狼に取らせて、子供の前に投げておりましたな。

前席でも触れましたが、やどりぎは他の樹木に寄生をし、そこから生命をいただき黄金のように輝く存在であります。「生」のシンボルと思われまます。

雪童子は気まぐれにその枝を子供に投げつけ、子供は不思議そうにそれを拾ってずっと手にし

ておりました。これは「生きている子供が生命の印を手をしている」という構図となっておりすな。

さて次は、ではなぜ雪童子はその子供を助けたかということでありすな。

雪婆んごの命令に従って、雪童子は雪を降らせ、しきりに鞭を振っておりました。雪狼も大活躍で、このあたり一帯は大吹雪になりました。雪童子は泣きながらもがいている子供を見つけました。

そこで何を見たのでしたか。手にしているあのやどりぎでした。それを見た時、雪童子は何を感じたのでしょうか。先ほどの気まぐれで投げつけたあのやどりぎをこの子供がしっかりと手にしていたのです。

この瞬間を賢治さんは《「あのこどもは、ぼくのやったやどりぎをもっていた。」雪童子はつぶやいて、ちよつと泣くようにしました。》と書きました。

なぜ泣くようにしたのでしょうか。

この時、雪童子の心に浮かんだのは、自分の前世の姿。ここに生きていた時の自分がいる。この子供に自分と同じ運命を味あわせたくはない。子供の握りしめているやどりぎを見て、この子を守ってやろうという自分でもよく分からない感情が急にわきあがった。「ちよつと泣くようにしました」はこのように読めてくるのです。

このあたり一帯を大吹雪にせよという雪婆んごの命令に反してまで助けようとする、不思議な

気持ちがこのとき雪童子に湧きあがったのですな。

大吹雪の中、何度も何度も雪婆んごに隠れて雪童子は子供を庇かばいます。赤い毛布を掛け、その上を雪で覆いながら、しばらく眠っているようにと声をかけます。

でも子供にはその声はただの風にしか聞こえません。自分を助けてくれているものがいようなどとは夢にも思いません。

雪童子の助けようとする働きも、風の音としか聞こえない空しい行為かもしれません。生きているものと死んでいるものとの世界ははつきりと分かれている。賢治さんはこう言いたかったのかも知れません。

嵐が過ぎ、雪婆んごが海に去った後、雪童子は残った三人の仲間たちに、じつは子供を一人助けたのだと告白しております。この三人もみな雪婆んごに「連れ去られた」同じ運命をたどった子供たちの今の姿だとすれば、雪童子の言葉をそのまま受け入れてくれたのだと思います。誰ひとり咎とがめた者はおりません。みな死の世界に「とられた」同じ運命の子供たちです。この連帯感によって、雪婆んごの命令に背いてまで助けた雪童子の行為を許したのであります。

さてまだ考えなくてはならないことがございます。それは題名にもなっている「水仙月の四日」とはなにかということですよ。

前席でも触れましたが、水仙の咲きだす月とはなんともメルヘンチックな命名ではありませんか。

でもこれは誰が口にしてるのですかな。これは村の人びとを始め、広く人間世界で使う暦ではありません。雪婆んこの言葉にしか現れていないことにご注目ください。

「こつちへとっておしまい。水仙月の四日だもの、一人や二人とったっていいんだよ」と、「あまあいいあんばいだった。水仙月の四日がうまく済んで」の二か所です。

一番目は、「一人や二人、こつちの世界（死の世界）に子どもを取つてもかまわない。なぜなら水仙月の四日だから」ということで、二番目は「大吹雪を降らせる水仙月の四日の行事が無事に済んでまあよかった」ということでしょうな。ここには水仙の咲きだす春の季節を楽しむ、そんなニュアンスはまったくありません。

水仙月ならば子供の一人や二人は死の世界に連れ去つてもよい。子供を殺してもこの月でならば許される。とするとこれは「人間どもよ、水仙月とは恐ろしい月なのだ、用心せよ」という警告の意味が含まれた、吹雪による死の世界を覗かせる「恐怖の月」の名になってまいります。

これは絶対に人間世界での暦ではありません。恐るべき冷酷な自然界の暦です。
私めを含めたこの作品の読み手は、このメルヘンチックな題名にこれまでずっと欺あざむかれ続けてきたのではないだろうかとしきりに思うのです。皆さま方はいかがお考えでしょうか。

さてまだ問題がありますよ。

それはあの雪童子が空を見上げて歌った二連の歌のことです。雪童子はこの場所にやってきてすぐに歌っております。

先ほど触れましたが、雪童子はこの地に大雪を降らせるための前触れとして雪婆んごに命じられてやってきておりました。この歌はここに雪を降らせるための天への願い、もつと踏み込めば、天への命令とも思えるのです。

カシオペア座には「ガラスの水車をまわせ」、アンドロメダ座には「ラムプのアルコホルを噴かせ」とどちらも命令形です。「ぼやぼやしていると、もう水仙が咲きだしてしまうぞ」と、「あぜみの花がもう咲いてしまうじゃないか」と何かを急がせる内容となっております。春の来るのをしばらく抑えていくれとは読めませんか。

そのために水車を回せ、ラムプを噴かせよ。この地に大吹雪を起こすために命じられてやってきた雪童子による、祈りにも似た一種の呪文とも読めてまいります。

するとこの場面は、雪童子は前触れの仕事として大自然の星に呼びかけ、この呼びかけに応えて空から青びかりが波になってわくわくと降ってきて、天が答えたのだと読めます。

こう考えますと、雪童子は「水仙月の四日」という行事をうまく遂行するため、雪の女王ならぬ雪婆んごに命じられ、雪狼二足を連れてこの地にやってきたということがいつそうはつきりいたします。

天に呼びかけ、あたりの様子を窺い、入念に準備をしていた雪童子の姿が浮かんでまいります。しかしそこで偶然に赤い毛布の子供を見かけてしまった。雪の中に倒れた子供が手にしていたやどりぎを見て、その子供を助ける気になった。このように物語は進行したのですな。

さて物語もいよいよ最後の段階になって、仲間と別れた雪童子にはまだここでやるべきことが残っています。

あの子供のその後を確かめなくてはなりません。果たしてその子供は助かったのでしょうか。皆さま方もご記憶のことと存じますが、これについて前席の最後でも疑問を呈しておきました。

もう一度ていねいに読み返してまいりましょうか。こうでした。

《かんじぎをはき毛皮を着た人が、村の方から急いでやってきました》：(略)：「お父さんが来たよ。もう眼をおさまし。」雪わらすはうしろの丘にかけあがつて一本の雪けむりをたてながら叫びました。子どもはちらつとうごいたようでした。そして毛皮の人は一生けん命走つてきました。》

たしかに「うごいたようでした」としか書かれておりません。はつきりと「うごきました」とは書いてないのです。ここは微妙な表現でありますな。雪から見えた毛布のはじが、風で動いたとも思えるのです。

子供は助かったのか、助からなかったのか、賢治さんは明確に答を出してはいないのです。

謎が残りますな。皆さま方、どうお考えでしょう。それに、謎はまだこれだけではありませんぬ。雪童子はたしかに「お父さんが来たよ。もう眼をおさまし」と呼びかけております。

そのため、この人はこの子供のお父さんだと、どうしても読んでしまいます。でもほんとうにお父さんでしょうか。この人は「村の方から急いでやってきました」と書かれていますよ。

村の方から？ あれつ、お父さんは町にいたはずではなかったのですか？

子供が吹雪で倒れたのは午後の三時頃。あたりはもう暗く、それ以後は一晩じゅう、夜中の二時ごろまでそれこそ大雪が「降って降って降った」はずです。子供は一足先に町から村の家に帰る途中に、この大吹雪で遭難したのでした。お父さんがその日に町を出たとしても、子供より遅れて出たはずで、このあたり一帯の大吹雪のときに、子供より先に家に帰りついていたとはどう考えて考えられません。

いやいや、子供だから遭難し、大人だから遭難しなかったのだ、とも考えられますな。しかし町から村の家までどれほど離れているか書かれておりませんし、大人であれば、吹雪の中を家まで山道を歩こうとする危険をあえて冒すでしょうか。これも疑問です。では「村の方から急いでやってきました」と書かれているこの人はいったい誰だったのでしょうか。なにか不気味です。謎ですな。

さて皆さま方、いかがこの作品をお読みでしたか。演者である私めも、これまでは「水仙月の四日」というメルヘンのような題名のために、家路をたどる子供が吹雪の中に倒れ大変な目にあつたけれども、危ないところで親切な雪童子に助けられて、やれよかった、と読んでおりました。しかしこの雪童子を「とられた」子供の今の姿として読み返してみますと、隠されていたものがない姿を見せはじめ、物語が一転いたしました。

雪童子とは誰かをきつかけにして、「水仙月の四日」という題名に潜む謎、その雪童子がどう

してこの場所にいるのか、そして見えない星に呼びかけたのはなぜかなどいくつかが見えだしました。しかしまた、なぜ雪童子が子供を助けたのか、いや果たして助かったのかどうかさえはつきり分らないのです。

雪婆んごや雪童子、雪狼など雪の精霊の背景など、謎はまた新しい謎につながります。どうもこれは読み違えているのかなと疑いつつ読んでおりますと、賢治さんのとほうもない想像力の彼方に連れていかれそうになります。そして底知れぬ物語の深さにおののくばかりの思いがいたしましたな。

さてこの度は「水仙月の四日」について、第三席と第四席と二回にわたって、勝手気ままに、つい駄弁をふるってしまいました。三鷹大沢の賢治の会の皆さま方には、なにとぞ眉に唾をつけながらお読み（いやお聞き）くださらんことを。

さて次は何をもって皆さま方のお耳を拝借いたそうかと、迷っているところでございます。本日はありがとうございました、ではこれにてごめんください。



地人館 E-books デモ版

*ページのレイアウト等は電子版と異なります。

宮澤哲夫 (みやざわ てつお)

1935 (昭和 10) 年 長野県松本市生まれ

早稲田大学第一文学部英文科卒業

東京工業高校 (現・日本工業大学駒場高校) 勤務 (1961~2000)

宮沢賢治研究会会誌『賢治研究』編集委員 (1992~2002)。

宮沢賢治学会イーハトーブセンター理事 (1999~2002 / 2009~12)

鎌倉・賢治の会会長 (2005~14)・現顧問

三鷹大沢・宮沢賢治の会主宰 (2015~)

[著書]

『宮沢賢治 童話と〈挽歌〉〈疾中〉詩群への旅』蒼丘書林 2016

[受賞]

第3回宮沢賢治学会イーハトーブセンター功労賞 2018

賢治寄席へようこそ I

著者 みやざわてつお 宮澤哲夫

初版発行 2021 年 4 月 2 日

発行 ちじんかん 地人館

〒 116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3 階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7937

<http://chijinkan.com>

©2021 Tetsuo Miyazawa